

## ヘンリー・アダムズとシカゴ万国博覧会

大井 浩二

ヘンリー・アダムズ (1838-1918) は、アメリカが生んだ最高の知識人の一人と目されている人物であるが、この『ヘンリー・アダムズの教育』(私家版1907年、公刊1918年)の著者は無類の博覧会好きでもあった。エリザベス・キャメロンに宛てた手紙(1904年5月15日)では、「わたしがどんなに博覧会を楽しんでいるかは、あなたもご存じです」<sup>(1)</sup>と書いているし、三人称で書かれた『教育』(第32章)では、「彼は万国博覧会というものの宗教を奉じていて、それなしには教育はまったくの不可能事であると考えていた」<sup>(2)</sup>とまで言い切っている。みずからを失敗者と断じ、放浪の旅をやめることのなかったアダムズの「教育」にとって、「ホワイト・シティ」体験はどのような意味をもっていたのだろうか。

アダムズは、開幕直後の5月と閉幕直前の10月の2回、シカゴを訪れているが、彼における博覧会の印象を論じようとする者が、ほとんど例外なしに取り上げるのが、『教育』の「シカゴ」と題する第22章であることは言うまでもない。1893年の恐慌騒ぎに巻き込まれたあと、アダムズは息抜きの気持ちもあって2度目の博覧会見物に出掛けるが、そこで彼は「百年を充たすほどの研究材料を見つけ、彼の教育は混沌の上にひろがった」と述べている。たしかに、ミシガン湖の湖畔に出現した「ホワイト・シティ」の建物はすばらしく、パリの美術学校(エコール・デ・ポザール)で教育を受けた芸術家たちが見事な花を咲かせているという印象は否定できない。この奇跡的とも呼ぶべき仕事を完成させた建築家や彫刻家たちは、いつかは名声を博すことになるかもしれない、とアダムズ感じながらも、その一方で、シカゴ博覧会の風景のなかに「連続性

の切断」あるいは「歴史的なつながりの断絶」を意識せざるを得なかった。彼が「教育はシカゴでは混乱をきわめていた」と書いているのは、そこでの彼が「自分たちの知らない、これほどにも多くの事柄に、具体的な形で直面したことなどない、遅れた人間」の一人であることに気づいたからであった。だが、シカゴ博覧会の何がアメリカを代表する知識人に、「遅れた人間」であることを痛感させたのか。

アダムズは会場に展示されている最先端の科学技術の産物に接しても、何一つとして理解することのできない自分を発見する。これまで「蒸気機関」を運転したことも、「電話」で話したことも、ワットやアンペアやエルグといった単位が何を意味するかさえも知らない歴史家にとって、すべては彼の理解をはるかに越えた未知の世界であった。「歴史家に対してのみ、博覧会はまじめな努力をしていた」という、いささか逆説めいた発言からも察することができるように、アダムズは博覧会を理解するための努力を惜しまなかったが、そこにあふれている「新しい力」のまえで、歴史家はまったくなす術を知らず、逆に「科学者は、歴史家の無知とナイーブさを理解することができなかった」。こうして、断ち切られた歴史の連続性を目の当たりにして、茫然と佇むばかりであったアダムズは、「歴史家の誰であれ、機械的な関係をまえに腕を拱いて座り込んだのは、歴史家が存在し始めてから、これがおそらく最初であつたろう」と回想している。

結局、歴史家に無力感を味わわせるばかりのシカゴ博覧会が、アダムズにとって、なによりも混乱あるいは混沌を象徴する風景であったことは、「博覧会そのものが哲学を拒絶していた。その最後の扉が閉じられるまで欠点を見つけることができるとしても、説明を必要とすることは何一つとして説明することができなかった」という言葉が証明している。「ノアの箱舟以来、この博覧会のような、ルーズで、まとまりを欠き、漠然として、つかみどころのない、無関係な思想や中途半端な思想や実験的なわめき声からなるバベルの都が、五大湖の水面をかき乱したことはなかった」というのは、しばしば引用される有名な一文だが、そこでの「バベルの都」のイメージは、シカゴの「ホワイト・シ

ティ」が歴史家アダムズの理解することのできない、混乱と無秩序の支配する空間であったことを、なによりも雄弁に物語っているのである。

もちろん、『教育』が執筆されたのは1905年であったから、そこに述べられているのは博覧会から12年もたった時点でのアダムズの印象であった。だが、1893年から自伝の執筆までには、たとえば1895年における「聖母」の発見や1900年における「ダイナモ」の発見といった、彼の生きざまに計り知れない影響を及ぼした事件が起こっている。はたして彼は博覧会を見物した直後においても、やはり「ホワイト・シティ」を「バベルの都」と断じていたのか。シカゴ博覧会をアダムズは「文化の混乱の反映」と見ていたと主張する R. R. バジャーは、「博覧会に対するアダムズの当初の評価はわかっていない」という但し書きをつけているが<sup>④</sup>、『教育』とはまったく無関係に、アダムズが1893年の時点で下していた「評価」は、彼が書き残した何通かの手紙から推察することができる。

5月20日にドナルド・キャメロン夫妻のゲストとして、夫妻の専用列車でシカゴへ向かったアダムズは、博覧会を駆け足で見物したあと、翌週の5月26日にしたためた手紙のなかで、わずか「2日間の滞在」のあいだに受けた「精神的な興奮と混乱」によって、「いつものバランス」がすっかり崩れてしまって、博覧会の印象をうまく話したり書いたりすることができない、と告白している<sup>⑤</sup>。彼の世代のアメリカ人による「新しい芸術の創造」や「古い芸術の鑑賞」を見てみたいとかねてから思ってきた人間として、「自分の思いが突然、夢にみていたよりも素晴らしい姿をとるのを目の当たりにすると、しばらくはショックで口もきけなくなる」と、いささか大袈裟な調子で語りながら、「能力」と「限界」を知りつくしている建築家たちが「これほどまでに高いレベルに到達することができるとは思ってもみなかった」と正直に打ち明けている（『教育』におけるアダムズがハントやバーナムやホワイトなどの名前をあげて、これらの建築家の価値が認められる日がくるかもしれない、と語っていたことが思い出される）。

だが、博覧会の建築物の芸術性はたしかに大きなショックであったけれど

も、なによりもアダムズを驚かせたのは、「シカゴの態度」であった、とその手紙は続いている。アダムズとしては、シカゴがビジネスや金儲けに巧みなことは十分に承知していたが、その世俗的なシカゴから、「わたし自身の領域」つまり「ビジネスではなく美」の領域において、これほども多くのことを教えられることになるうとは、まったく予期していなかった。シカゴは何百万ドルという費用をかけ、限りない努力を重ねた結果、「ギリシャ人が見たならば喜び、ヴェネツィアも羨ましく思うようなもの、しかし、明らかにビジネスではないもの」を創り出している、とアダムズは手放しで称賛している。「われわれはビジネスも芸術もわかっていない」ということを、美などとは一切関係がないかに見えるシカゴに教えられるということは、彼にとっては予期せぬ驚きであったらしい。その結果、アダムズに言わせると、博覧会の会場をあとにした彼の目には、「シカゴの建物のすべてが以前より2倍も高く見えた」ばかりでなく、シカゴ名物の「風にさえも皮肉と嘲笑がこもっている」ように感じられたというのである。「ホワイ・シティ」の風景によって「わたしはぺちゃんこに押し潰されてしまった」という表現は、彼の受けた印象がいかに強烈であったかを、如実に示している。「シカゴから戻って来たわたしは、まえよりも賢く、幸福な人間になっていた」と、手紙の最後に書き記しているアダムズが、『教育』のなかで「ホワイ・シティ」を「バベルの都」と呼んでいたアダムズと同一人物であるとは到底思えないのである。

アダムズの2回目の博覧会見物は弟のブルックスと一緒に、この時はシカゴに2週間滞在しているが、その印象を書きとめたジョン・ヘイ宛の手紙（10月18日）にもまた、彼が前回に受けたと同じような「ショック」について語られている<sup>90</sup>。アダムズはまず、「この地上をやっとさまよっている、あわれな年老いた幽霊」のような彼にとって、シカゴ博覧会の娯楽部門とも呼ぶべきミッドウェイ・プレザンスは「甘やかな休息」の場であって、そこでの「いかさま」や「いんちき」を大いに楽しんだことに触れ、「立派な建物のなかをせせと歩き回って、フクロウのようにダイナモや蒸気機関を眺めた」ことも忘れずに指摘している。だが、なによりもアダムズの目を奪ったのが会場の建築で

あったことは、最初の場合と同じであった。この建築は、彼の説明によると、「金で作られた世界」に住んでいる「人間という動物」つまり「われわれの内部」にいる、本能だけあって理性をもたない、迷信深くて、無知な野蛮人」に対する「一つのアピール」にほかならない。壮麗な建物で囲まれた「荣誉の中庭」において、「わたしはかすかな知性の光が無知な金持ちたちの顔を輝かせ、いつもの自己満足にぼんやりと浸りきって、自分の長所だけを考えている、どっちつかずのハーヴェード・カレッジの卒業生〔つまりアダムズ自身〕の目にも突き刺さるのを目撃した」とも語っている。たしかに、この万国博覧会はシカゴの「金満家たち」の財力によって可能になったのだが、このように素晴らしい芸術を建築家たちが作り上げることができるとすれば、「今後は金満家たちのことで絶望するには及ばない。われわれはいつでも連中を溺れさせることができるのだから」といった調子で、アダムズは書き綴っている。

こう見てくると、アダムズの「当初の評価」は『教育』における印象と正反対といってもよいほどに異なっていることが判明する。1905年の彼が博覧会に反映している「文化の混乱」を強調していたとすれば、1893年の彼の口調はいかにも明るく、まさに「まえよりも賢く、幸福な人間」のそれであって、手紙のどこにも『教育』の歴史家の悲痛な叫びを聞きつけることはできない。読者としては、その落差の大きさに戸惑うばかりだが、そもそもシカゴ博覧会の風景を眺めたアダムズが、「押し潰されてしまった」と感じるほどに興奮したのはなぜだろうか、という疑問を禁じ得ない。ヘイ宛の手紙の内容について、W. M. デッカーは「彼がこれほどまでに自分が欺かれるのを（すくなくとも、そのように自分を描くことを）許したことはめったにない」<sup>(9)</sup>と説明しているが、なぜ1893年のアダムズは自分を欺いてまでも博覧会を賛美する必要があったというのだろうか。

19世紀末のアメリカにおいて、18世紀以来の美德の共和国が危機にさらされたことは、あらためて指摘するまでもあるまい。永遠に不滅であるとされてきた例外としてのアメリカ合衆国は、「金メッキ時代」の腐敗と混乱のなかに投げ込まれる。みずからを18世紀人と規定し、その生涯を失敗の連続とみなして

いたアダムズにとって、このアメリカ共和主義の運命は、悲劇的といってもよい意味をもっていた。いや、彼の書き残した一連の著作は、アメリカ例外主義のたどった破滅への道を検討することに当てられていた、といっても過言ではあるまい。1879年に発表された『ギャラティン伝』や、その翌年に匿名で出版された小説『デモクラシー』(1888年)には、アメリカ建国以来の共和主義の挫折を目撃したアダムズ自身の姿が浮き彫りにされている<sup>9)</sup>。他方、同じ時期に書き継がれていた大著『アメリカ合衆国史』(1889-91年)もまた、ジェファソンとマディソンの時代のアメリカを活写しながら、じつは美德の共和国を内部から蝕んでいた腐敗と崩壊をテーマにしていると考えることができる。アダムズは「1800年の合衆国」と題するプロローグに「アメリカの理想」という1章を用意しているが、そこで述べられている「思想と芸術のアメリカ」という「理想」を、はたしてアメリカ人は実現することができるだろうか。この章の最後で、アダムズは、アメリカ社会は「その社会的な力を、より高度の思想の形に変え得るか」「人類の精神的、知的な必要を充たすことができるか」「宗教と芸術に新しい生命をあたえることができるか」「より高度な人類を生み出すことができるか」などといった問を発していたが、19世紀末のアメリカの閉塞した時代状況をつぶさに目撃した歴史家には、その間のいずれに対しても否定的な答えしか出すことができなかったにちがいない。「混沌」という言葉が『アメリカ合衆国史』のキーワードになっている、というのはアーネスト・サミュエルズの指摘であったが<sup>10)</sup>、アメリカ社会のなかに「混沌」しか見いだすことのできなかったアダムズとしては、「思想と芸術のアメリカ」という夢を放棄するほかはなかったのである。

このように、アメリカの現在と未来に暗いペシミズムを抱いていたアダムズにとって、シカゴのジャクソン公園に忽然と出現した白一色の「ホワイト・シティ」は、砂漠のなかのオアシスのような印象をあたえたのではないか。1893年の彼が博覧会において口がきけなくなるほどのショックを受けたというのは、そこに彼が長年夢見てきた理想のアメリカを発見したことを暗示している。この点について、先に引用したデッカーは「博覧会を目の当たりにして、

『アメリカ合衆国史』のプロローグで彼が共和主義を奉じる理想主義者たちのヴィジョンと呼んでいた『思想と芸術のアメリカ』を思い出させる何かに、彼は強く印象づけられたにちがいない<sup>90</sup>と説明している。ジェファソンやギャラティンが目指していた「思想と芸術のアメリカ」が実現することはあるまい、という暗い思いにとらわれていたアダムズに、明るい希望を抱かせたのが、「ギリシャ人が見たならば喜び、『ヴェネツィアも羨ましくなるような』シカゴ万国博覧会であった。新しいアメリカの可能性をひめた空間を象徴しているかに思われる「ホワイト・シティ」の風景に、彼が感激をおぼえたとしても不思議はあるまい。だが、それが結局は中西部の空に現れた蜃気楼のような幻影にすぎなかったことは、『教育』に持ち込まれている「バベルの都」のイメージからも容易に推察することができるのである。

ところが、まことに意外なことに、『教育』第22章においてもなお、アダムズが「ホワイト・シティ」の「時間のない、審美的な夢」と「古典的な壮大さ」を数多くの入場者とともに楽しんでいた、といった趣旨の発言がなされている。「人生に倦み、世故にたけたヘンリー・アダムズでさえも、強い印象を受けた。彼は榮譽の中庭に腰をおろして、自発的なオプティミズムの気分で、連続性の奇跡をじっくりと考えたが、その奇跡はシカゴのような弾力性に富む大都市が数世紀を飛び越え、古代ギリシャに未来を根付かせる（そう彼には思われた）ことや、古典的な統一の整ったリズムのなかにさまざまな矛盾を解消することを可能にしたのである」<sup>91</sup>というラーザー・ジッフの指摘は、どのように受け止めればいいのだろうか。

たしかに、シカゴの博覧会を回想するアダムズは「じっくりと考えるためにリチャード・ハントの建てたドームの下の段階に腰をおろした」と書いているが、それに続けて「アラ・ケリの段階の場合とほとんど同じくらい深く、ほとんど同じ目的のために」という表現を付け加えている。このアラ・ケリというのは、「天国の祭壇」を意味するイタリア語で、ローマにあるサンタ・マリア・ディ・アラ・ケリという教会を指している。1860年5月、はじめてローマを旅行した22歳の青年アダムズは、この教会を何回か訪れて、階段に腰を掛けてい

るが、それはほぼ100年まえの1764年10月にエドワード・ギボンが同じ場所で『ローマ帝国の興亡』の着想を得たというエピソードのためであった(第6章)。その後、しばしばこの教会に足を運ぶようになったアダムズは、リンカーンが暗殺されたときにも、その階段で瞑想にふけたことを記している(第14章)。やがてアラ・ケリの階段に座するという行為は「彼にとって、ほとんど迷信のようになった」(第15章)だけでなく、この教会はまた「すべての思考の糸を中心に引き寄せているように思われた」(第24章)とも書かれている。ある暗殺事件の報に接した彼が「このために人は一生ずっと、アラ・ケリの階段に腰をおろしていたのだろうか」(第32章)と述べているのは、「アラ・ケリの階段」が単に「迷信」以上の象徴的な意味をもっていることを暗示しているのである。

ギボンが「アラ・ケリの階段」に腰をおろしたのは、ローマ帝国がなぜ崩壊したかを考えるためであったが、一人の旅行者としてローマを訪れたにすぎないアダムズもまた、ギボン以来の多くの歴史家たちと同じように、「なぜ!なぜ!!なぜ!!!という永遠の問いかけを自ら問い続けていた」(第6章)と述べている。「アラ・ケリの階段」は、メルヴィン・ライアンが明快に説明しているように、「ローマの崩壊を表し、なぜそれが起こったかという『永遠の問いかけ』を発していた」<sup>10)</sup>と考えることができる。だが、ローマの崩壊は、ただローマの崩壊だけを意味しているのではなかった。1860年のアダムズは、「有害」で「不道徳」なローマ、「無秩序」と「悪徳」にみちたローマのたどった運命が、ほかならぬアメリカ共和国のたどる運命であることを感じ取っている。「ローマという単語をアメリカという単語に置き換えれば、問題は個人的になった」と彼は語り、「ローマの歴史の不道徳性」にもかかわらず、「ローマは現実であった。それはイギリスであった。それはアメリカになろうとしていた」と述べているのである。いや、その後のアダムズがくりかえしローマのイメージでアメリカ合衆国を描写していることを思い合わせるならば、アラ・ケリの教会の階段に腰をおろして瞑想にふけることは、そのままアメリカの運命に思いをいたすことを意味していたと考えていい。「人は一生ずっと、アラ・ケリの階段に腰をおろしていた」というアダムズの言葉は、彼の生涯の仕事



がアメリカ共和国のゆくえを見届けることであったという事実を裏付けているのである。

こう考えてくると、「ホワイト・シティ」の回想に導入されているアラ・ケリのイメージは、アダムズが博覧会の風景のなかに、ローマと連想される「無秩序」や「崩壊」を読み取っていたことを示していると言えるのではないか。ここでのアラ・ケリへの言及は、アダムズの称賛する「博覧会の芸術」が「人間の墮落によってローマの至福千年的な約束が覆されたと同じように確実に引き下ろされることになる理想」であることを物語っている、と W. M. デッカーは論じているが<sup>99</sup>、「確実に引き下ろされる理想」は「博覧会の芸術」だけではない。それは1893年のアダムズがシカゴ博覧会のなかに見いだした「思想と芸術のアメリカ」のヴィジョンそのものであった。あるいは、「ホワイト・シティの基本的な要素」が「ローマ主義」であったと主張するスタンレー・アプルバウムが指摘しているように、「そのローマ主義は、ジェファソンの場合がローマ共和国のそれであったのとは異なって、ローマ帝国のそれであった」<sup>100</sup>と言えるならば、リチャード・ハントの建物の階段に腰をおろしていたアダムズの目には、アメリカ共和国の運命とローマ帝国のそれとが完全に二重写しになって見えたにちがいない。『教育』におけるアダムズにとって、シカゴ万国博覧会は、やはりアメリカ文化の「混沌」を象徴する事件であった、と結論しなければならないのである。

にもかかわらず、アダムズはシカゴで「古典的な統一」を発見しているといった解釈がなされるのは、『教育』第22章のシカゴ博覧会に関する記述を、アダムズがほとんど唐突に「シカゴは統一としてのアメリカ思想の第一の表現であった。人はそこから出発しなければならない」という断定的な文章で締めくくっているからである<sup>101</sup>。ただでさえ難解な文章を書くアダムズが、にわかシカゴ博覧会が「統一」のシンボルである、などといった言を弄するのは、読者を混乱に陥らせる結果を招くばかりだが、彼の真意は、博覧会の印象を語った部分ではなく、それに続く記述を分析することによって明らかになってくる。というのも、「人はそこから出発しなければならない」のあとに続く新し

いパラグラフの冒頭に、アダムズは「ワシントンは第二であった」という一文を置いているのであり、これは上からの流れから考えて、「ワシントンは〔統一としてのアメリカ思想の〕第二〔の表現〕であった」と解釈しなければならない。『教育』の読者としては、ワシントンにおけるアダムズの経験からシカゴにおける「統一」の意味を逆照射する必要に迫られることになるのである。

シカゴからワシントンに帰ったアダムズを待ち受けていたのは、長年アメリカの政治家を悩ましてきた本位貨幣の問題であったが、この年、議会はついに金本位制の採択に踏み切ることになった。彼は銀行家と資本家を嫌悪して止まなかったが、その圧力に敗北する形で、「資本主義への屈服」という状況を甘受しなければならなくなる。「1793年から1893年にかけての百年間、アメリカ国民は二つの力のあいだでためらい、動揺し、右往左往してきたが、一方の力は単に産業的なものであり、もう一方の力は資本主義的で、中央集権的で、機械的なものであった」とアダムズは書いているが、1893年の時点において、後者つまり「資本主義的な体制」による支配が本格的に確立した、というのが彼の分析であった。アダムズはまた、資本主義が「資本と資本主義的方法」によって運営されることになれば、「南部や西部の農民たち」は「資本主義的な体制」のような「きわめて複雑で、集中化した機構」に参加することができなくなる、と指摘しているが、この「農民たち」こそ、アメリカ共和国を支える「神の選民」(トマス・ジェファソン)であったのだから、銀行家と資本家が支配する資本主義のアメリカは、18世紀以来の美徳の共和主義の理念からもっとも遠いところにあるアメリカに変貌したことになる。

根っからの18世紀人をもって任ずるアダムズは、「変人」扱いされるまでに「銀行家と資本主義的社会に対して昔ながらの嫌悪感を抱いてきた」だけでなく、長年にわたって「彼の18世紀と1789年の憲法とジョージ・ワシントンとハーヴァード・カレッジとクインジーとプリマス・ピルグリムズ」のために闘ってきたが、いまや「まったく孤立している自分自身を発見した」と告白している。こうしたアダムズの投げ込まれたワシントンの政治的状況を説明して、R. P. ブラックマーは「銀と金の闘いは、二つの統一の主張の葛藤であった」と説

明し、理性や伝統などの「古い統一」と情性や本能などの「新しい統一」とを対立させている<sup>99</sup>。前者がアダムズのいう「単に産業的なもの」、後者が「資本主義的で、中央集権的で、機械的なもの」に関わっていることは言うまでもないが、さらに前者を農民たちの共和主義的な「統一」、後者を銀行家や資本家の資本主義的な「統一」と呼ぶこともできるにちがいない。そして、銀本位制と金本位制との闘いにおいて、後者が勝利を占めたことは、ブラックマーのいう「新しい統一」が支配的となったことを意味している。もし1893年のワシントンが「統一」としてのアメリカ思想を表現しているとするならば、この「統一」は「新しい統一」と読み替えなければならないのである。

ワシントンでのアダムズは、「資本主義的な体制」という「新しい統一」を目の当たりにして「まったく孤立している自分自身を発見した」ばかりか、「力の機械的な統合全体」は「彼の生まれ落ちた階級の生命を踏みじったが、アメリカが賛美する新しいエネルギーを制御することのできるさまざまなモノポリーを作り出した」と語っていた。この言葉は、「機械的な関係をまえに腕を拱いて座り込んだ」と回想していたシカゴでのアダムズの姿を、ほとんど自動的に思い出させはしないか。そこでの彼はまた、「歴史に新しい位相をあたえた」ダイナモを「新しい力」と呼び、「もしその進歩が過去十年間の割合のままで続くならば、その結果として一世代以内に無限の、費用のいらないエネルギーを生み出すだろう」と感じていたのであった。アダムズにとって、ワシントンでの金本位制もシカゴでのダイナモもともに、「新しい位相」をもたらす「新しい力」にはかならなかった。「シカゴは彼にとって、すくなくとも意識下においては、『単に産業的なもの』の敗北を、そして、資本主義の中央集権的で、機械的で、統合された社会の究極の勝利を象徴していた」<sup>100</sup> というアラン・トラクテンバーグの指摘は、『教育』の第22章において、一見まったく無関係に思われるシカゴ博覧会の記述とワシントン政界の記述が、二つの「統一」の対立と「新しい統一」の支配という共通のテーマを扱っていることを物語っている。「ワシントンでの政治的観察がシカゴでの視覚的体験を説明していた」<sup>101</sup> という J. C. レヴェンソンの発言もまた、シカゴとワシントンがともに「新し

い統一」としてのアメリカ思想の表現であったという事実を確認していると考えたい。

「シカゴは統一としてのアメリカ思想の第一の表現であった。人はそこから出発しなければならない」と書いたとき、ヘンリー・アダムズは、ラーザー・ジッフが指摘するような「自発的なオプティミズムの気分」で万国博覧会の風景を眺めていたのではない。シカゴが「新しい統一」の勝利を象徴しているということは、取りも直さず18世紀以来の美德の共和国の伝統という「古い統一」が崩壊したことを意味している。彼としては、眼前にひろがっている「ローマ主義」を基調とした「ホワイ・シティ」の上に、アメリカ共和国の悲劇的な運命を重ね合わせざるを得なかったにちがいない。『教育』の「シカゴ」と題する第22章は、「歴史家には、つぎのように問うことしか残されていなかった——いつまで、どこまで！」という言葉で終わっているが、アダムズは、そのあとに続けて、「アラ・ケリの階段に腰をおろして」という一句を付け加えてもよかったのである。

#### 注

- (1) *The Letters of Henry Adams*, eds. J. C. Levenson, Ernest Samuels, Charles Vandersee, and Viola Hopkins Winner (Harvard UP, 1982-1988), 5: 587.
- (2) Henry Adams, *The Education of Henry Adams*, ed. Ernest Samuels (Houghton Mifflin, 1973).
- (3) R. Reid Badger, *The Great American Fair: The World's Columbian Exposition and American Culture* (Nelson Hall, 1979), 120.
- (4) *The Letters*, 4: 103.
- (5) *The Letters*, 4: 134-35.
- (6) William Merrill Decker, *The Literary Vocation of Henry Adams* (U of North Carolina P, 1990), 36.
- (7) Adams, *The Life of Albert Gallatin* (Peter Smith, 1943); Adams, *Democracy*, in *Novels, Mont Saint Michel and Chartres, The Education*, eds. Ernest Samuels and Jayne N. Samuels (Library of America, 1983). 前者については拙著『美德の共和国』（開文社、1991年）、126-47、後者については拙著『金メッキ時代・再訪』（開文社、1988年）、71-83 をそれぞれ参照されたい。
- (8) Ernest Samuels, *Henry Adams: The Middle Years* (Harvard UP, 1958), 369.

- (9) Decker, 36.
- (10) Larzer Ziff, *The American 1890s: Life and Times of a Lost Generation* (Chatto & Windus, 1967), 20.
- (11) Melvin Lyon, *Symbol and Idea in Henry Adams* (U of Nebraska P, 1970), 114.
- (12) Decker, 38.
- (13) Stanley Appelbaum, *The Chicago World's Fair of 1893* (Dover Publications, 1980), 13-14.
- (14) ここでの“first expression”をしばしば見受けられるように「最初の表現」と訳するのは、誤解を招く恐れがあるし、つぎの“Washington was the second.”との関連を見落とすことになる。
- (15) R. P. Blackmur, *Henry Adams* (Harcourt Brace Jovanovich, 1980), 105-107.
- (16) Alan Trachtenberg, *The Incorporation of America: Culture and Society in the Gilded Age* (Hill and Wang, 1982), 219-20.
- (17) J. C. Levenson, *The Mind and Art of Henry Adams* (Stanford UP, 1957), 330.